学位論文要旨

「自分のことば」を育む国語教育の研究

広島大学大学院教育学研究科
教育学習科学専攻　学習開発学分野
カリキュラム開発領域

D194269　丸田健太郎

Ⅰ.問題の所在

筆者は姉弟がろう者のSODA（Sibling Of Deaf Adults/Children）である。SODAは親がろう者であるCODA（Children Of Deaf Adult）と同様、ろう文化と聴文化のバイカルチュラルな存在であることが明らかとなっている（中井・丸田，2022)。筆者は聴者でありながら、幼少期よりろう文化に関わりをもち、姉弟と他者間の通訳などの役割を担ってきた。このような背景から、筆者はSODAであるというアイデンティティをもつ。しかし一方で、その立場によるしんどさを抱えて生きてきたという経験もある。他者に対してSODAとしての葛藤や悩みを語ったとしても、その生きづらさが理解されることは少なかった。このような SODA としての経験に由来するアイデンティティは、時には自身の生きづらさに、時には自身の生を前進させるリソースとなってきた。

筆者にとって手話言語は、自身の生活の中で欠かすことができない言語であり、SODAとしてのアイデンティティの基盤となっている。筆者自身は手話を母語であると自認しているが、筆者は聴者である。そのため、学問上の定義や社会の中にある通説では、筆者の手話は「母語」とは認められない。このような認識にさらされたことで、筆者は学問の定義が個人のことばの実態を踏まえていないこと、個人のことばの実態と学問の「母語」をめぐる認識の間には乖離があると考えるに至った。

このことに加え、異なる教育領域の間では、「母語」について認識に差異があることが確認できる。例えば、国語教育研究／実践内では「「国語教育」＝「母語教育」」とされることがある。しかし、第二言語教育分野や継承語教育分野では、「母語教育」とは学習者の継承語の教育のことを指す場合が多く、「国語教育」は現地語の教育であると理解されている。つまり、国語教育は母語教育を標榜しているが、国語教育内における「母語教育」と他分野における「母語教育」の認識には差異があり、他の分野では「国語教育」といっても、直接「母語教育」のことを指すとは限らない。

また、「国語」という概念については既に批判的検討が多く重ねられている（イ，1996 、安田，2006)。また、浜本（2004） は「国語科」という名称そのものを問題視している。このような、「国語」という概念への批判を無視して国語教育の枠組みを設定することはできない。

以上を踏まえて、国語教育の対象を新たに設定する研究も行われている。府川（2022） は国語教育の対象として、「一人ひとりのことば」という新たな枠組みを提案している。府川の研究では、国語教育の対象として自明のものとされてきた「国語」という概念は捨てられ、新たな視座を設けることで国語教育のあり方を問い直すことが目指されている。また、国語教育以外では細川（2021） が「じぶんの〈ことば〉」という概念から人々の固有のことばの説明を図っている。府川や細川らの研究が示すように、従来の国語教育の対象や人々のことばの枠組みから離脱することで、新たな学習者の捉え方やことばの解釈を生み出すことができると考える。

本研究では、筆者にとっての手話言語のような、従来の「母語」認識では「母語」と認められない言語があると仮定し、考察を行う。これを通して、国語教育の対象として、従来の言語や母語などの枠組みを離脱し、学習者個々の「ことば」への視座を提示し新たな学びの姿を描くこと

を目指す。これにより、原田（2009:11）　が国語教育に欠けていたと指摘する「一人ひとりの学習者にとって切実な『ことばの学び』」の具体を提示することができると筆者は考える。

Ⅱ.研究の目的

本研究の目的は、従来の言語・ことばの枠組みを解体し、国語教育の対象として学習者のことばの捉え方を再構築したうえで新たな学びの姿を描くことにある。そのために、国語教育の実践としてどのように学習者の「言語」や「ことば」を捉えるべきであるのかを問い直すことが必要であると考えた。このための視座として、本研究においては「母語」という概念に着目した。具体的には次の３点に示した通りである。

目的１：従来の「母語」認識の整理と考察

本研究では、従来の言語教育における「母語」の認識を整理し、その課題を考察する。この考察を通し、従来の「母語」観に代わる〈学習者の母語〉概念を提出する。本研究では、〈学習者の母語〉という概念を導くための過程として、見えない「母語」概念を仮定し、その概念の検討を行う。さらに、見えない「母語」概念の検討を通し、これまでの「母語」認識では捉えることが困難であった〈学習者の母語〉概念を設定する。

目的２：「自分のことば」という視座の提案

これまで国語教育の対象として語られてきた「言語」や「母語」という枠組みの課題、そして本研究で提示する〈学習者の母語〉という概念について再検討する。本研究では、学習者のことばの表出に必要な要件として他者の存在に着目した。ここから、他者との関係性が構築される中で生まれることばをその学習者の「自分のことば」として捉えることの意義を述べる。

目的３：「自分のことば」が交わされる国語教育実践の考察

目的２において提示した「自分のことば」という枠組みから、筆者が実際に行なった国語科の授業を分析する。分析の枠組みとして、他者との関わりの中で生み出される「自分のことば」を設定し、児童にもたらされた変容が他者との交流によって生み出されたものであることを示す。この分析から、国語教育の対象として「自分のことば」を育てることの意義を考察する。

Ⅲ.研究の方法

本研究では、上記の目的１～３を達成するために次のような研究方法をとる。

方法１：言説分析（第１章）

本研究では、言語教育研究に内在化される「母語」をめぐる言説を明らかにし、その言語思想を探索するために言説分析を行う。分析の対象としては、国語教育、日本語教育、継承語教育・バイリンガル教育をそれぞれ対象として選定する。

国語教育研究における「母語」をめぐる言説を探索するための分析対象として、全国大学国語教育学会から刊行されている学会誌『国語科教育』を選定する。これは、国語教育研究／実践について高度な論理性を持って記述された学会誌を対象とすることにより、「母語」に関する言説が

構成されている思想的背景を捉えることが可能であると考えたためである。

『国語科教育』掲載論考の分析から抽出されたカテゴリーを援用し、日本語教育、継承語教育・バイリンガル教育の論考についても分析し、類型化を行う。日本語教育においては日本語教育学会が刊行している学会誌『日本語教育』、継承語教育においては母語・継承語・バイリンガル（MHB）学会が刊行している学会紀要『母語・継承語・バイリンガル（MHB）研究』を分析の対象とする。

方法２：ナラティブ研究（第２章）

本研究では、〈学習者の母語〉概念を検討するための基礎研究として、見えない「母語」を持つ当事者の言語的背景や経験を明らかにするナラティブ研究を行う。ナラティブ研究をもとに見えない「母語」を持つ当事者のアイデンティティ形成の課題を分析することを通して、日本社会における言語規範や「母語」思想を明らかにすることができると考える。

方法３：従来の「言語」「母語」概念の検討と離脱（第３章）

国語教育の実践として学習者のことばを捉えるための視座として、本研究では「自分のことば」という捉えを提案する。そのために、第１章から第２章までの考察から明らかにされた「言語」や「母語」という枠組みの課題を整理し、前章で提示した〈学習者の母語〉概念の意義やその限界を指摘する。

方法４：国語教育実践から児童の「自分のことば」を見とる（第４章）

前章で提示した「自分のことば」という視座を用い、筆者が行なった国語教育実践の分析を行う。これにより、「自分のことば」がどのような場面で生み出され、児童の読みの変容や他者との関わりの過程に位置付けられるのか考察することができると考える。

Ⅳ.本研究のまとめ

本研究のまとめを、各章ごとにまとめる。

第１章　言語教育における「母語」認識の検討

第１章では、国語教育、日本語教育、継承語・バイリンガル教育における「母語」という概念がどのように用いられているのか整理を行なった。

まず、国語教育では「母語」という概念は学習者を「日本語母語話者」「非日本語母語話者」とラベリングする一つの要素として用いられていることが明らかとなった。このような「母語」認識では、学習者を同質化し、その言語的な多様性を捉えることができないという課題が生じる。また、日本語教育ではその教育目標が日本語母語話者の日本語能力を基準に設定されていることから、母語話者主義から抜け出すことができていないことを指摘した。継承語・バイリンガル教育では、「母語」という概念によって学習者の出自が説明され、現在の学習者の言語的背景を捉えることができていないという課題を明らかにした。

第２章　「母語」認識の転換を要求する語り

第２章では、第１章で述べた、見えない「母語」の当事者の語りを取り上げ、その課題を考察した。本研究では、SODA 当事者である筆者の語りを中心に、SODA 同士の対話や SODA と CODA の対

話をナラティブ分析した。これにより、見えない「母語」の当事者が抱える課題を明らかにするとともに、筆者が固有に持つ手話とアイデンティティの課題について考察することができた。

ナラティブ分析の結果、見えない「母語」の当事者である筆者らは、社会からのメタメッセージなどを受け取ることで、他者に自己の経験を語ることが阻害されており、自身のアイデンティティ形成に課題を生じさせていたことが明らかとなった。一方、見えない「母語」はその当事者のアイデンティティを語る際に欠かすことのできないものであることも確認した。本研究では、このような、見えない「母語」の存在を証明するとともに、言語教育の対象として位置付けることの必要性を考察した。

第３章　「母語」から「自分のことば」に向かう「実践」へ

第３章では、見えない「母語」の設定から他者に自己が認められる要件を探るため、承認論を理論的枠組みとし、見えない「母語」の当事者のアイデンティティ形成を考察した。また、筆者が大学生を対象に行なった実験授業の結果から、従来の「母語」概念に代わる〈学習者の母語〉概念を提出した。これにより、従来の学問規定に基づく「母語」の捉えを脱却し、学習者の言語生活から言語的側面を捉え直す視座の提案を行なうことができた。ここでは、ゴッフマンのアイデンティティ論を参照することにより、〈学習者の母語〉という視座が学習者の個を捉えるために有効であることを示した。

さらに、国語教育の対象として「言語」「母語」〈学習者の母語〉を再度検討し、学習者のことばは他者との関わりの中で対象化されることを明らかにした。まず、「言語」や「母語」という捉え方では、学習者が同質化され、従来の学問規定の問題から抜け出すことができないことを述べた。また、〈学習者の母語〉という視座の有効性を指摘しつつ、その概念から学習者の言語的側面を捉えようとした際に生じる、「言語」の枠組みの問題から離脱することができないという課題を示した。

第４章　他者を引き受け「自分のことば」を育む小学校国語科単元の開発

第４章では、第３章で提出した「自分のことば」が紡がれる過程を明らかにするため、筆者が実践した国語科の授業を分析した。また、児童が「他者のことば」を引き受け、「自分のことば」を生み出し、さらに他の児童に「他者のことば」としてどのように引き受けられるのか考察するため、児童 A を抽出児童として選定し、考察を加えた。

児童 A の分析では、普段の学校生活の中で自身の衝動的な行為を自制することができない様子が、この実践では少なかったことに着目した。この児童は、教材の中で忌み嫌われる存在として描かれた登場人物と自己を重ね合わせることで、作品に対する読みを深め、自分なりの意見を表現することができていた。このような他者との出会いが、他の児童への語りかけに「自分のことば」として表れ、学級という社会集団の一員として授業に参画する意識をもたらすに至ったことを述べた。

Ⅴ.本研究の成果

本研究の成果は、以下の３点にまとめられる。

成果１：言語教育の領域ごとにおける「母語」認識の整理し、「見えない『母語』」を包摂する言語教育の枠組みを構築することの必要性を述べたこと

まず、国語教育、日本語教育、継承語教育・バイリンガル教育の領域における学会誌を分析し、従来の「母語」概念の整理を行なったことである。これにより、それぞれの言語教育領域が前提としてきた「母語」の捉えを整理し、その差異を考察することができた。

ここで「母語」認識をめぐる差異を明らかにしたことで、それぞれの言語教育領域が対象としている学習者の言語的側面を浮き彫りにし、どの言語教育の領域においても視野の外に置かれてきた学習者の姿を映し出すことができたと考える。

本研究では、このような従来の「母語」認識では研究・教育の対象とされてこなかった「母語」を「見えない『母語』」として取り上げた。さらに、そのような「母語」を持つ当事者の語りを分析し、見えない「母語」を持つ当事者はその「母語」が周囲から認められないことによる葛藤や、自身の言語的側面の複雑さからアイデンティティの形成に課題を生じさせていることなどが明らかとなった。以上を踏まえ、見えない「母語」を包摂する言語教育の枠組みを構築することの必要性を述べた。

成果２：学習者の「ことば」を捉えるための新たな枠組みを追究し、「見えない『母語』」、〈学習者の母語〉、「自分のことば」という概念を得たこと

成果１で述べた、見えない「母語」話者の語りを分析することを通し、本研究では「言語」「母語」に代わる〈学習者の母語〉という概念を提示した。筆者の SODA としての経験を分析の中心に据え、他者と対話することを重ねて表出された語りから、筆者のアイデンティティ形成がどのような社会的要因から阻害され、また、対話によってアイデンティティが形成されていったのかを考察した。

また、「言語」「母語」という概念を離脱することに加え、〈学習者の母語〉概念が内包する課題を再検討した。学習者の言語的側面を他者が捉える際には、既存の学問の枠組みを援用するしか方法がないことや、他者の定義では学習者自らの多様な言語的背景を説明することができないという課題を見出した。以上を踏まえ、本研究では学習者と他者との関係の中で生み出される「ことば」を「自分のことば」という視座から捉え直すことの意義を述べた。「自分のことば」という視座を設けることにより、他者と自己とのことばを用いた関わりやそれによってもたらせる自己変容を捉えることができると筆者は考える。

成果３：「自分のことば」が交わされる国語教育実践の構想と、「自分のことば」を分析概念として考察を行い、「他者のことば」を引き受けることで「自分のことば」が成立することを具体的に明らかにしたこと

成果２で述べた「自分のことば」という枠組みを援用し、筆者が授業者である授業の分析を行なった。児童が他者との交流の中でどのような過程をたどり、自己を変容させたのかを見とるた

め、本研究では児童 A を抽出し、考察を行なった。

取り上げた授業の全体像や児童同士の関わりを分析することで、児童 A が普段の学校生活の中で見せる衝動的な行動が起こらなかった要件を考察した。また、児童 A に対して行なったインタビューの考察から、本研究で取り上げた「山ねこ、おことわり」の実践においては学級という社会集団の中に参画することができているという実感が生まれていることがわかった。これは、他の児童の「他者のことば」を引き受け、自身の少数派の意見を提示するという「自分のことば」が生まれたこと、そしてそれが「他者のことば」として他の児童に引き受けられたという関わり合いによって生まれたものであると考えられる。

Ⅵ.本研究の課題と今後の展望

本研究の課題は、次の２点である。

課題１：「自分のことば」を育てる国語教育実践のための要件の考察

まず、「自分のことば」を育てる国語教育実践に必要な要件をより詳細にすることである。本研究においては、筆者が行なった「山ねこ、おことわり」の実践を取り上げ、「自分のことば」が紡がれていく過程を考察した。その中で、多くの児童は教室という社会の集団として授業に参画し、「他者のことば」を引き受けながら「自分のことば」を紡いでいくと捉えることができた。

ここで取り上げた実践から、そのような「他者のことば」を引き受け、「自分のことば」で語る児童の姿を見出すことができた背景には、それぞれの学習者が自身の考えを自由に発言することができる場として国語の授業が展開されてきたことが考えられる。一方、そのような場として機能するためにどのような教材を用いる必要があるのか、さらに授業や単元をどのように展開することで、「自分のことば」が紡ぎ出されていくのかについて、今後さらに考察する必要がある。

課題２：「自分のことば」を育てる国語科カリキュラムの構築

先に述べた教材開発や授業方法の課題に続いて、「自分のことば」を育てる国語科カリキュラムを構築するという課題が残されている。本研究では、一つの授業・単元における児童の変容を見とることはできたものの、系統的なカリキュラムを通してどのような変容が生まれるのかについては考察が至っていない。

課題１で述べたように、どのような他者とどのように出会うか、その教材や授業方法の要件が明らかになれば、この要件を軸としてカリキュラムを編成することができると筆者は考えている。例えば、「山ねこ、おことわり」のような、登場人物が自身とは立場が異なる他者との出会いを通して変容する物語をカリキュラムの軸として設定することも可能である。

このような国語教育実践において様々に想定される他者との出会いによる児童の変容や、それを通した自己の更新を主軸としたカリキュラムを編成することは、「ことば」を介して他者とつながることの価値を学習者自身が見出し、学びとして内面化していくことにつながる。今後は児童が自身の「自分のことば」を相対化し、学びとして位置付けていく過程を記述し、実践を積み重ねていきたい。

Ⅶ. 引用参考文献

イ・ヨンスク（1996）『「国語」という思想―近代日本の言語認識―』岩波書店

中井好男・丸田健太郎（2022）「音声日本語社会を生きるろう者家族の生きづらさ―見えないマイノリティによる当事者研究―」『質的心理学研究』21.91-109.

浜本純逸（2004）「司会者のことば」『国語科教育』55,3.

原田大介（2009）「国語教育における新たな学習者研究の構築―個へのまなざしの必要性―」『国語科教育』65,11-18.

府川源一郎（2022）『一人ひとりのことばをつくり出す国語教育』ひつじ書房

細川英雄（2021）『自分の〈ことば〉をつくる―あなたにしか語れないことを表現する技術―』ディスカバー携書

安田敏朗（2006）『「国語」の近代史』中公新書